官刻

普救類方

巻之三上

巻之三上

諸病門

中寒　中湿　中熱

霍乱　吐瀉交

發熱

欬嗽

呃逆

反胃

内閣文庫

函	冊	号	類
九五	一二	二四九一六	和書
三			

(五冊)

冊	架	函	号	類
一二	八	六七	二四九一六	和書門

内閣文庫

番號	和 24916	
冊數	12 (5)	
函號	195	33

国立公文書館
National Archives of Japan

普救類方卷之三上

丹羽正伯　纂輯

林良適文庫

傷寒

傷寒煩つさ二七日のうち頭痛熱あり汗出る

葱の白根を米一ツ叩き湯ゼ粥に煮て食し汗出く

金匱　本草綱目

又方細辛末一撮胡桃仁ふつ葱白七つ共二ツ搗くらし

こて煎じ飲く衣服をおつく巻て汗をいだべし　千金方

又方蒼朮二ツ荊芥一ツ甘草三分ゆく煎じ用ゆ　同

又方乾艾をゆく洗煎じきりに用ひ汗出く食べし　本草綱目

傷寒煩つさ六七日にして熱盛にして狂乱のごとく走出んとする

蛭蚓又六十ふみどとり腹の内のちさく一去小便いれ煮て汁を

飲ましむ　或いは生ずる蚯蚓のけを去りのみそぐ　本草綱目

又方　青布一尺　水にて洗ひ絞り　猪の脂　同

又方　白石二分　黄連一分　粉にして　芎藭の煎湯にて用ゆ　同

又方　龍脳　蛇黄を粉にして　二分　鶏子の白と合わせ　丸いれ如き

法を飲ませ　同

又方　鶏子一つ　ほそくして　吞ましむ　同

傷寒　熱甚しく　熱身面　その小黄色　小なり　猪

茵蔯　山梔　同じくあつきに　黄ど　食後　のみそう　衛生易簡方

傷寒　汗を発して後　却て熱寒あるい　虚煩なり

芍薬　六分　甘草　炙　六分　附子　二分　水　天門冬　二盃入　一盃に煮ど

法の用ゆ　本草綱目　附子の事　製法の事あり

傷寒　汗を多く発して　却ひくりさ　肉うごくに　得効方

白本　防風　牡蛎　粉各等分　粉にして二分つ　酒又は飯のとう湯にて用ゆ

傷寒　汗を出して　或いは吐して　或いは下して　その後ちぐはぐ　苦しみ　氣ぐるしく　眠らざるに

大黄　梔子仁　四つ　甘草　一分　天門冬　一盃入　七分　一盃に煮て用ゆ　同

傷寒　熱さんして　胸　ちいさくひを結胸とす

若参　二分　磁　天門冬　二盃入　一盃に煮つめ　飲ましむ　喉と指　ちくちくさしてらし　本草綱目

又方　枳実を麸にかさまぜ炒粉にして　二分　飯のとう湯にて用ゆ　衛生易簡方

又方　巴豆と黄連と代搗細にして　津にて丸　脇の中にいれ其上

ちりに灸をすえくすり　十便良方

傷寒　陰症にて　腹ひえ

乾姜　二分　生附子　一分　天門冬　一盃半入　一盃に煮つめ用ゆ　得効方

附子の事　製法の事あり

又方　百草霜　二分　枯茗　一分　同じく粉にして　熱酒一入　飲べし　汗出く

いゆるなり　同

又方　百合十匁　炒姜　粉末にして二匁づゝ飯のそり湯にて用ひ　衛生易簡方

傷寒小便しぶりて頭痛腰いたみ　川烏頭乾姜各分　炒塩一撮入れて姜汁用ひ汗出て食べし　本草綱目

又方　大なる附子一箇　皮と臍とを除き粉にして二匁　空腹に一匁の内へ入れ湯にて飲べし　良久して臍の下熱し　金

同　附子の事　製法の事あり

傷寒咽いたむ　耳草二十匁　さゞめ　蜜　水五合にて煮二合半に煎つめ飲む　同

傷寒呃逆あくやまざる　巴豆皮を粉にして一匁白湯にて用ひ　同

又方雄黄二匁酒二合半にて煎じ二合半に煎つめ熱して嗅べし　同

傷寒嘔逆つゝく食をこのむ　湯にて泡にする半夏一匁　生姜二匁　水二盃入れ七分に煎じつめ二度に飲べし　得効方

傷寒小便しぶり臍の下脹るに　石燕を粉にして五分づゝ煎白湯にて用ひ　本草綱目

又方　茴香を粉にして生姜汁にて塗　并に茴香六匁　滑石六匁　耳茎にて粉にして白湯にて飲べし　同

傷寒大便しぶる　當歸四分　黄連八分　水二盃に一盃半に煎つめ用ひ　同

傷寒血吸血いづる　滑石の粉を飯のそり湯にて練り大豆の大さに丸じて二十粒嚼ぐべし　良久して飲下して後血の多く出るものは安し　如ぶと鮮なる血出るは悪し　世系を用ひ　同

傷寒して衄血并に吐血止ざるに
艾葉を生地黄汁に浸し阿膠二匁を
二度いれて煎じつめ赤馬通のけを煮りとり右の薬の内へ
入挽まぜあたりに用てよし　十便良方

傷寒又は時毒瘟病にて喉痛ひと甚しくて豆のごとく
やうに思ふに
艾葉三匁水天目に一度入煎じ手けを痛所へ塗てよし　痛
つよきに艾葉三五百匁水三升も入煎じ手けて痛所へ
ひたし洗ふてよし　得効方

傷寒陰毒にて身冷
呉茱萸酒に挽まぜ湿し絹袋に入れ蒸極熱し脚んを
熨してよし　十便良方

傷寒熱毒にて目つくいたむ
霧蜂房一匁水天目に二度入一度に煎じ洗ひ目沢あらひ
てよし　衛生易簡方

傷寒熱毒にて口中瘡出来たれば
艾葉麻皮をとりて去蜜炙り艾を粉にして麻湯に
て用ゆ并に右の粉を口中にぬりてよし　得効方

傷寒風毒にて身中痒き止ざるに
雄黄をやき其烟にて肛門を燻べてよし　本草綱目

傷寒諸症全く後に熱気加和肌熱し身痩るに
米胡一匁耳菜二分又蜜水に煎じてよし　同

傷寒全く後乳汁つゆ出て
て病く孫久しくなると労復食復といふ
棠薇茶を煎て薬に飲てよし　同

傷寒全く後男女共に交つて右の病て孫久しくなる

大概陰嚢腫或々嚢そぼりて板ゝ入股中絞るごとく痛こゝ行り
婦人月水の時腰ゝ冷ひる衣を焼灰ゝして二三匁白湯にて飲べし　同　附後備急方
又方交る女の衣服をたゞ病人のよりあるふと良久して甦るべし　同
又方青竹のあぶら皮状二合こをげとり水三合にて煮あらはし沸こそ
をけをのこしてとり　同
又方蓼の汁搗をけを飲てとり　蓼の乾たるいわゆて波蓼でつゝ用ゆ　同
又方葱の頭状搗破ゝいれかさぬぜのそとり　同
又方山梔子状さげこみてとく濾ごのとり　同
傷寒陰陽易い男女病食ゝく後数十日してもいまだ血気そのいまだ物毒ゝ
を殺りゝる内男女交合をれば男の病状女うるなり女病後まれば男その
病をうるなり大概牙をとゝく小腹を　熱ゝ頭をく眼中花のごとくなること乃
ゝえ膝拘急死なんとすることのなり
婦人の褌襠陰門ゝをれ正状切とり焼灰ゝして二匁白湯にて用ゆ　同

に三度用てとり　女房ゝ男の褌を用ゆ　同
又方雄鼠屎を鹽梨と同じく水ゝして煎じて飲て衣服状覆く寒て汗
を出すとり　同
又方蚯蚓六つとり水一升にて煮一合ゝ煮つめ飲て衣服を厚く重ね汗を
かゝとり　同
又方乾姜四匁粉ゝ白湯ゝかさぬぜをきり小飲く衣服をいつく覆
汗を出すとり　同
又方巫一把雄鼠糞七つ水二合を入煎じまる往く煮つめ搾ゝとる
状飲衣服をあつくおかひ汗状出すとり　十便良方
又方黍米を粥ゝ煮汁状いれかさぬぜ飲汗を出すとり　本草綱目

時疫

時疫煩つさ強つらく頭痛ゝ項こゝり腰いたむなどゝ

小蘇二三合と搾汁をそりたるに飲てよし　本草綱目

又方皂莢を焼粉にして汲てその水に生姜汁と蜜とを加ぜてよし右の粉二匁入ばかりまぜのこして汗を出してよし　同

又方瓠子一つ赤瓜一合半のうちへいれかさねぜ別に水七合半煮て沸してその瓠子の水をいれ急にのこして汗を出してよし　肘後備急方

又方蕎荷根と葉とを搗汁をぬりそりたるに多くのこして飲てよし　同

又方蕎の根を搗汁をぬりそりたるに多くのこしてよし　同

又方紫胡八分牛蒡二分水天目に一盞入て煎じ八分めに煮つめ熱して食後に用てよし　衛生易簡方

小児時疫熱甚しく頭痛するに

本草六分白檀三分粉にして用ゆ并に右の蕎や白湯にて服含して塗てよし　本草綱目

時疫渇するに

生藕をつきしぼりたる二合半程の中へ蜜を右の汁十分一程いれ搗まぜ飲てよし　肘後備急方

又方藍澱一匁ばかり水二合半の内へいれかさねぜのこしてよし　本草綱目

肘疫にて頭痛するに

生地黄生薑荷葉等分搗たらし汁をとり麝香少でとりいれ汲て

のむ　いれのむべし心のうち煩しさをおぼへてよし　同

肘疫熱甚つよく乳のごとくにしてくるしみをもだえざるに

苦参を粉にして蜜にて練り枇杷の核の大さに丸して十粒ばかり落葉乃

英湯にて用ゆ　ゆさい苦参ばかりにて英にて用もよし　同

又方芭蕉の根を搗汁をぬりそりたるのこしてよし　肘後備急方

時疫にて頭面卒に腫熱毒内をせめくるに赤く腫るるばかりなれば

痛つよくして

牛蒡子を研てらし酒にいれ煎じつめて膏にして紙にぬり腫るる

不一付くらう并に古の膏粉酒にて飲バ後ひさ痛やひべ　彙聚単方

又方鹿杖根をこまかに水にて煮くそけて痛所をひたしてよく　本草綱目

時疫熱病にて目黄こ小便も黄ゆくて黄疸のごとくなるく

竹茹又合小麦七合石膏十匁の二升水合して煮て七合こ煮ド

はゆ飲くらう　同

又方苟宿根を搗けをこりうりて多く飲疫を出てよう　衛生易簡方

時疫発斑い才うちに赤くまだらなるものは死どろなり

蝦蟆一ひき腹をやぶり腸を取り去りさり搗くだらう吞てよう或ハ

五月五日に蝦蟆をそう乾し焼粉にして白湯にて用くよう　肘後備急方

又方本書に出て黄ド用ゆ　本草綱目

時疫熱胃にあるゆり痢にて喋ゆづる或い大こトりて後胃中虚し

くなりとあり

茅根一匁水天目こ二盃入一盃こ煮ドつめ用ゆ　同

時疫吐つくく食をのれざるを

新こ一つ水にて煮三又変ずぐ沸こて注ぎ水の内へ注ぎこくる

附子粉ゆり吞くくらう　同　肘後備急方

又方半夏又ハ生姜一匁水天目一盃を入一盃こ煮ドつめ用ゆ　方

半夏の事制方法の示こあり

熱病にて痢中をぐ人煩しきに

芫花一合水三合こくく煮ド一合こ煮つめ絞き布にて右の汁をひた

しこくり痢の上こ搗てよう　衛生易簡方

熱毒にて下血をこくく

羚羊角を粉こして白湯にて飲トりくよう　肘後備急方

時疫頭大こ腫こて大頭瘟と云ふ

黒豆半合牡丹草多くて一匁水二合まして煮ド飲てよう　本草綱目

時疫熱病の後痢病にて脂血を下し不食なるこ

白鶏骨を粉こして二匁飯のうり湯にて用ゆ　肘後備急方

時疫愈て後辛に補を労し或い食或い酒をもて傷られ
て労復とす
鼈甲を焼一二匁白湯にて用ゆ　肘後備急方
又方芎草を水にて濃黄ドのごとくして　同
又方芎根を水にて黄ドのごとくして　同
又方山梔子十ばかりを煮つめ飲て汗を出すべし　衛生易簡方
右一合を煎て絞りて用ゆ
又方杏仁四十九磨て合て煎て黄ドつめ飲て汗をかしてよく合てそれを用ゆ　同
時疫狂乱
正月元日に麻子十四粒小豆十四粒を白湯にて呑下すべし
并に麻子小豆十四粒づつ井のうちへ投いれるべし　肘後備急方
又方ひそかに時疫を病人の床の四角に灸を一壮づつもえ
ば一人の者時疫の邪にそまることなし　同
又方小豆を新しき布裏にいれ井の中に打ること二日にして取出し
男は十粒女は二十粒呑べし　同
又方降真香を焼くべし小児は若なるべし　同
又方呉茱萸十匁を井の中にいれ飲食に用るべし　彙聚単方

中寒

定気小ばかり頭痛定気なるべし
胡椒七粒丁香七粒粉にして黄白を接膏のごとくして右二味をもり
まぜあるものにくわりあるを合て搗て甚あつく
熱あつく度ひ卧て汗を出して食べし　本草綱目
又方呉茱萸二匁水にて黄ドに用ゆ　同
又方胡麻を炒熟して内に擂酒に入飲べし　同

中湿

湿にあらずして小便ちがひ天仮くぶるる
附子七分 炮 桂二十五分 草一分 さんせう合して
生姜七片 水五合 煎て三盃いれ一盃半小薬じ食おして飲べし 得効方
附子のる製法の事あり

湿にあらずして喘ぐ 四肢なえさま
白朮二分 乾姜酒 天門冬 酒 三盃入一盃に煎じ一度に用ひ酒にて飲ざる
者にあらずして薬じ用ゆ日の中に三度 表一度用ふべし 同

中熱

大暑の節 炎天に道を歩行し或い農人など日にてりつけられ
暑ふあらず小便ちがひ咽渇さ牙熱し甚きもの、卒死するものあり
蓼の葉を搗て濾 薬じのびべし 本草綱目

又方白麪を水にいれうるほまぜ飲ぶし 同
又方生姜二寸 汁かうく清して飲下すべし 得効方
又方生姜を一塊うく汁にして飲下すべくよつて暑あらず
嚼て絞ざるふい生姜と研ふかさ法ぜ病人の口に灌れくよし 暴證知要
又方蒜 研ごらし水にかきまぜ病人の口に灌れくよし 同
又方地に孔をうり水をいれ搅て濁しあるべく沈し病人の口に
灌入べくし 千金簡易方
又方熱湯をそろくと死人の口にそそぎされ頭を抱あげれば腹の内へ
湯いりくよしかへるべし 本草綱目

暑氣をぬけぐに
肉桂 茯苓 各等分 搗篩 蜜にて練り龍眼肉の大さ丸じ一粒づく
汲べくの水にいれ杵ぐさ用ゆ 同
又方白朮一分 麦門冬一分 水にて煎じ薬に加へ常にのびべし方 衆効

霍亂　附交腸痢

霍亂乾嘔止ざらく

良姜二分末二つわして煎じ冷しく用ゆ　本草綱目

又方蘿の根ゆわしく煎じきりに用ゆ　同

霍亂吐逆止ざらふ

糯米ゆわしいれ研をけを飲ゆ　衛生易簡方

又方陳皮生姜ゆわしく煎じ用ゆ　同

又方梨の枝と葉とゆわしく濃く煎じ用ゆ　同

霍亂悶さわぐしく臥ともるらざらく

東むきの壁のちゆとりゆわいれ攪まぜ多くのそよう　本草綱目

又方芦根一分麦門冬五分ゆわ煎じ用ゆ　同

又方槐の葉桑の葉各六分甘草二分炙りゆわて煎じ用ゆ　同

又方茶一分ゆわして煎じ乾姜を粉にして一分右の茶湯にて用ゆ　同　衛生易簡方

又方蕪白根二十箇末二十ゆわ七合まで煎じ五合に煎つめ用ゆ　簡方

又方乳髮を燒灰にして一つわど塩湯七合まの中へいれ攪まぜ飲ませを

ゆわく飲べし　肘後備急方

霍乱悶渇つよく

芦の葉ゆわ煎じのそよう　本草綱目

又方蕎子七分香薷二分ゆわして煎じのそよう　同

又方陳倉米又合ゆわ一升又合いれ煮てゆわく濃くきしをのそよ　同

又方黄粱米一升ゆわ二升八七合に煮つめ多くのそよう　同

霍乱渇つよく指節をうふ

米泔ゆわいわどものそよう　肘後備急方

霍乱泄瀉止ざらく

艾葉をゆわして濃く煎じ用ゆ　千金簡易方

又方附子一枚炙ると七分程なる紙袋庚の内へいれ煨し皮と臍とを削さりさぶして二分塩二分又蜜にてあり天目に二盃入一盃に煎じつゝ飲くらし　肘後備急方附子の事製法の所にあり

又方劉寄奴草をゆして煎じ用ゆ　劉寄奴病のごとくなるに用ゆ　本草綱目

霍乱して吐瀉止ざるに

芥子末を搗細しゆして衣り臍に傳くらし　同

又方扁豆番蕃茄天目に二盃れ一盃に煎じつめ用ゆ　同

又方胡椒三十粒を吞くらし　又い胡椒四十九粒緑豆百四十粒同じく

粉にしてなづ木瓜の煎湯にくのみそらし　同

又方蓮藕を搗けを絞りのみそらし　同

又方梅干を搗みて煎じかづのみそらし　同

又方乾姜粉にし磨にて煎じ呷くらし　同

又方陳皮裏をとりさ剉こ藿香等分ふしゆして煎し用ゆ　千金簡易方

又方桃葉を搗ゆして煎じ用ゆ　衛生易簡方

霍乱或いは吐或いは瀉し目まひしてこゝろ注腹ぐるしむに

大蒜一頭を搗くだらし井の水にかきまぜ用ゆ　彙聚単方

又方芭艾一把を天目に五盃入二盃に煎じ去りに飲べし　得効方

又方根実を姜汁にひたし炙り香にして粉にして飲べし　同

又方脊と腿との間のおりめ乃横紋の上に湯をひたしそゝぐ赤い赤く紫まだらの紋あるものなり布を絞汁を茶碗の破れる実にて刺やぶり血を出すべいゆるなり　彙聚単方

霍乱吐瀉つゝくるしみつゝ欲逆出さく止ざるに

乳より指一つ程下の骨のくぼみの中に小豆の大さ程なる文蛤

ちくさこ壮多とべし男い左女い右に灸とべし婦人い乳脇と屈め

乳脇のくぼみ灸とべし　薬の効なき者ふをこの灸法を用れ

暴證知要

暑乱のけが気つかなる物沢多く食して霍乱し腹の痛強くむし
耳茸乾姜吉仁桂各等分ゆして煮て用ゆ脈絶んやしてもよしまた
く冷ふい附子為末沢加へて用ゆ　治法彙　附子の事製法の下にあり
又方呉茱萸木瓜塩各一分ゆして煮て用ゆ　暴證知要
乾霍乱い吐せんとして吐もせず泻せんとして下りもせず腹とり満ていること
同じくして死なんとするとき
小蒜をゆして濃煮てたさりに多く用てよし　本草綱目
又方茱萸茱萸枠けを煮り飲てよし又乾ける茱萸をゆして煮て
用てもよし　同
又方古に穴をあり水沢いれかきまして濁してこれを少ど飲てよし　同
又方生姜をゆして濃煮しのびべし　同
又方塩を物絹につつみ腹と背とを熨べし　同
又方巴豆一粒皮と心と沢去樊湯にいれまりつぶし飲てよし　同

又方塩二分生姜一分同じく色の変るまで炒りて煮て用ゆ若病勢
つよきときのまに臺便をたの素の内へさし用ゆ　千金簡易方
霍乱或い物節し級いんとするとき腹中に焼乱あるに活べし
塩を脇の中に入るるつめたるに小灸を十四壯とへくよし并脇の下一寸
半ばを十四壯灸すべし　暴證知要
又方蓼一把ゆして煮て物節しるを煮べばひ脇に塩をかくつち灸
を十四壯とへくよし　同
霍乱困しつく備素を用ゆ金ざるし
ものき女の月水の時の薄褥四つけれたるをやき灰にして三分づつ酒
に飲ませし　本草綱目
又方梶葉一分茱萸一分茸草各等して三分ゆして煮て用ゆ　同
交腸痧い乾霍乱と同じ類の病にして俄に腹つらくいたること牡丹皮とも
ちるなり

茅根のしるを少つゝてたゝの脊の傍を破り血を出し或い舌の尖をやぶりて血を出すもよし　慈恵方

又方好白芷の粉を水にかきまぜ用てよし　衆妙方

又方針にて手の指の爪甲を一分ばかりをけて刺血を出べし又は脊より接骨に血を指の頭ふあつめ針にて血を出せばいよいよ　同

又方胡椒菉豆各四十九粒研粉にし水にて椀にかきまぜ用る　傳信応易方

又方塩十文煎湯一入うるさまぜ病人の口ふそゝぎ入れ塩の気強ふいてれいるゝやひ及ぶ　救急易方

感冒

風邪ふあらう物ゆえ頭痛するゝ

葱の白根を多くまぜ粥ふ煮て熱ふ入れ飲して食し汗を

出すべし　本草綱目

又方葱の白根を水にて煮て先生姜一塊を磨たの茹湯にて飲下し汗を出すべし　衛生易簡方

又方黒豆一合炒黒くし酒の中へ入煎じ飲て汗を出すべし　彙聚單方

又方葱白二三茎を生にて嚼煎酒にて飲下し汗を出すべし　同

又方生姜片にて搗ざらし煎酒一入飲て汗を出すべし　同

生姜小わらう又い風をひきやすくなるを治べし

萱根一文茎尖り苦茶各五分甘草一分者一つ水二盃

盃入一盃ふ煎ド日に二度用べし　得効方

風寒客熱ありて咳嗽いづゝ

生姜一塊口にふくみ口中ふたまる津を嚥くだし　本草綱目

風寒鼻ふさがり眼涙いづゝ

杏仁五合泔研つぶし水にて煮四五度沸して泔をあらひ去り
汗出すべし　金べい　本草綱目

小児風邪ひかり熱ぞ痛すること
天花粉五匁乳汁にて用ゆ　同

又方葡萄子を生にて粉にし二三匁温酒にて服すべし　衛生易簡方
のち湯にて再用ゆるもよし

発熱

発熱にわかに小便ふること
蕎麦を水にて煮どのこと　本草綱目

又方茸蕨皮をとり煎じてのこと　同
熱さしてふること間ハくふ

耳朶皮を去食後ふ食すべし　傳信易方
熱つくん同ること

搗るとやさ粉にして二三匁酒にてのむべし　本草綱目

心熱へ小便赤く面赤く唇ハさて間ハさて牙ぎしつくること
本草綱目　茯苓丹参竹葉とれゆて莫ど再用　同

皮膚熱さること燥ぐ赤く熱へ
蕎麦二匁水天用二匁入一匁ふ莫どつること用ゆ　同

肺火にて右の腋熱へ赤く息せること
蕎麦を粉にして水にて練り大豆ほど丸にして用　同

肝火にて左の腋熱へ赤く怒ること或ハ目腫ること
蕎連をさぐこと生姜汁にて炒赤くして粉にし飯のこり
湯にて練り大豆の大さふ丸ど一百粒づつ白湯にて用ゆ　同

小児熱さること
新ること二つ手服り密四半合ばかりにてかさまぜ再こと　同

小児熱さること風宅ふ赤ること又ハ食傷ばかりにて熱出ること

茨萸を生油にまぜ指ふつり小児の頭面頂背んのあらう
并に[illegible]のうらを磨とりてらう　本草綱目

疾飲

一切の疾病に
貝母を煎じ使ひ[illegible]秋冬浸と二日夏浸と一日ホとく取
あげ乾してあらひ乾し粉にし白湯に入のそらう　傳信元易方
又方青く物の指搦多少に[illegible]泡釣こめて注ぎ搦く布の
[illegible]く絞て汁二椀ばかりやさ地漏に入火をゆるくして茨ど一椀に熬
つるやさ物に貯ておき童に一つ切づつ熱湯に入うさまぜ飲べし　彙聚單方
又方指搦一つ拌でらう中黒牽牛の粉二匁見茨一つ上皮を
絞とをさりホ五椀入三椀に茨ど食後に一のむべし　得効方
又方半夏の粉を生姜汁にてねり解とる湿紙に[illegible]
熱灰の中に入煨にして熟[illegible]切て二匁づつホ二椀入一椀に

茨ど食後に飲[illegible]　同
又方陳皮を粉にして二匁ばかづつ沸湯に入のそらう　同
胸膈に疾塞つまり通ぜざるに
指搦の芦頭を粉にして二匁白湯にて飲指て咽をさづり疾
吐出てらう　本草綱目
又方陳皮一匁ばかり茨ど用ゆ　同
又方指搦を多くのこ指て咽をさづり疾を吐出てらう　同
疾胸の中にありてつまり脹いたみくるしむ
白茯苓五匁ホ二合まにて茨どまづ茨どつる蓉をいれ
毎び煮あらまさりに飲疾を吐出てらう吐ざるもの
は熱湯一椀飲ましめれば吐ること拍るり　衛生易簡方
又方糸瓜を焼粉にして青きの肉にて練り枇杷の核の大さ程に
丸じて一粒づつ口のうらにいれ拌ぐ紀のこくらう　彙聚單方

又方 砂仁を搗ぐ 紀蘇葡の後汁にて浸し一夜置き焙かわ
かく二分を煎じ沸湯にて用ゆ 彙聚單方

疾を吐して出で治せざるもの
半夏 桂心 二分 又 石菖蒲 烏頭 二分 右
けずりまぜたの粉を神妙丸の大さに丸じて一粒づつ寝さしめ
含ませ吐たるのち下して本草綱目 半夏の製法のあり
疾痰小児ごとに恐れ疾或いは吐
茯苓 半夏 七分 又 石菖蒲 生姜 二片 水 天門冬 一盞 入れ一盞に煎
じつめ肝に用ゆ 衛生易簡方 半夏の製法のあり
又方 涼膈 半夏 生姜 二片入れ煎じ 同半夏の製法のあり
又方 赤石脂 粉にして二分づつ飲べし 同
用いれば飲べし 同
又方 蓮搖を粉にして二分づつ飯の湯に入れ空腹に飲べし

同

風痰にて咽ぜりつき吐んとせるに
半夏 生姜 雄黄 各 粉にして餅糊をもって丸の粉に
衍り大豆の大さに丸じ一丸ずつ生姜湯にて用ゆ 本草綱目 半夏の製法のあり
指柳子を加へて用ゆ

風疾にて吐逆し頭痛目まひし欬嗽いづるに
天南星 半夏 各十五 天麻 五 粉にして白蜜二十五ひとつにして衍り胡
椒の大さに丸じ二十粒づつ少し煮あらかじめ生姜湯
の中に入れ飲べし 治法彙 半夏の製法のあり

又方 半夏二五 括樓仁十五 貝母 二五 ひとつにして粉にして蒸して餅糊
にして胡椒の大さに丸じ百粒づつ生姜湯にて用ゆ 得効方 半夏の製法のあり

風疾にて粒づつ咽ぜりつき夜外に
白僵蚕を炒好薬と名ずけ粉にして二五づつ寝る前に熱

湯に入飲べし　本草綱目

風疾にて食こゝろゝめるに

木槿花を干かいて搗粉にして一二匁づゝ茶にて朝夕用ひさ

花ゆゑ　彙聚單方

疾つよく熱たつに

藕のけ梨のけ等分にして飲べし　本草綱目

疾にて胸背わるくていたく疾やまぬに

搗機仁を炒殼を去るべしとり研て丸じ二三十粒程飯

のゝち湯にて用ひ　同

疾飲つよく上気眩暈して小便色うすく飲食すくなく

呉茱萸湯にて泡白茯苓等分にして粉にして密にして梧子丸じ

ゝ五十粒程白湯にてのむべし或は温酒にて用ひとり　衛生易簡方

脾胃弱くして疾ある人吐逆やまざるに

生附子一枚半夏一枚半を共に片に入水五合入七分に煎じ

附子の製法半夏の製法の下に有り

五分程服す　本草綱目

酒を多くのむより疾を生ずるに

招搖仁等分にして粉にして密にして梧子丸じ湯にて朝夕用ひ　彙聚單方

疾に瘀血をかねて胸のあたりこゝろ諸薬効なきに

蓬朮焙粉小にして又麻子大を少を入研細にして米粥にて丸じ

肉桂研細末にして酒にて服す

湯にて朝夕　治法彙

俄に疾こゝろにて四家をとり出すに

生地黄喉小そこ花疾を止めて食べし　得効方

喘息

喘息い疾つよく咽せりつき息ぜりをいふ

鶏子の白らとさり肉をくり孔をあけ千肉へ細る墨を入れつるあり
切る蓋をして紫さざら糖の火に肉へ埋め煨て熟して搗餅と
ゑ毎日食べてよし　本草綱目
又方牛蒡の葉を搗たぐらして一盃耳蕨のけをこがりて一盃煎まぜ煮熟し
ちさりて飲べし　同
又方菜木の内蟲虫一合炒蒸葡萄子一合炒杏仁皮尖ゑの小麦合
炒耳菌二ゑ合ゑ粉して蕎麦粉餅糊にて炒り胡椒の大さに丸ど
ゑ粒づく煎き生姜湯にて用ゆ　治法彙
又方滑石ゑ鍾乳粉十ゑ南星ゑ麦けホかきまぜ炒て十ゑ同じく
粉にし乾漆と煮く蕎と接とをさり搗ぐさき前の三味の粉を
つきまぜ胡椒の大さ丸どて四十粒づく生姜と米とを共ぐ煎じる
けるく用ゆ　得効方
又方胡桃肉を研細にしてゑの中へ蕎三七ばど入れて蕎の大

さ小丸どに中にゆくを津をのみ下すべし　同
卒小乳のぐり喘息つよく絶いらんとするに
非を搗けをこがりとり二三合程のそてよし　肘後備急方
又方菜根白皮二合生姜二ゑ呉茱萸ゑ合水七合酒五合いれ
煎ど二度ばど服して滓をさり去けを多く用てよし　同
又方干姜三十ゑ酒二合ゑ煎して清にしけを二合ばどく用てよし　同
肺熱上て喘息ゑ
薤白搗けをこがりとり二三合程のそてよし　衛生易簡方
又方胡桃肉十ゑ細茱萸ゑ研ゑ蜜をいれ搗批把の大さ小丸ど
口中にゆくを日ゑ小のみくりてよし　衆妙方
又方牛蒡根とさぶらを水にて煎茶どゑ食後に飲べし　本草綱目
又方透明阿膠ゑ炒茱萸猪烏梅肉焙り研ゑ蜜ゑ水にて
茶どゑ用ゆ　喘息にして上見づらに用ゆ　同

嗽息疾 水つくさふ

混舌七つ 熟大戻の肉一つ 煨し熟し一粒づ熟爻して 毎日紙一つ
に棄び煨し文をきり混舌ごとりと食してよし 本草綱目

又方 混舌一つ 麻黄四分 耳茸四分 水天目一つ 五味入八分 煎
じつめ用ゆ 同

又方 鯉一頭 こさ四十匁 ひなりを 鱠をきり 紙一枚をもつて 熟大戻一
入 煨し熟し 取出し 骨ばかり 研たぐらし 粉米一合 粥に煮て 右の鯉
の肉をいれ 同じく煮て 食しくらう 衛生易簡方

又方 白殭蚕 細末 粉にして 白湯に入 かきまぜ 寝る前に
のむべし 同

常忘つて 喉の中 鳴 久しく 食ぐるべし

熟まをかし 敲 小後の肉へ 二宮月 丸出し 煮て食べし 同

又方 榆の白皮 陰干し 焙 粉にして 二匁 水天目に一盞入

煎じつめ 餳のごとくして 日夜 うがい 用ゆ 同

食積の疼痛

拓 橘仁 半夏 山査 米麹 炒 右 粉にして 拓 橘の汁にて 練り
胡椒の大さに 丸じ 二三十粒づ 美汁 小酒 右の丸薬を
用ゆ 得効方 半夏の白製法のこと

又方 根 売 炒 桂 拓 橘 二匁 半夏 熱湯にて 泡こく 七度して
二匁 右四味 同じく 粉にして 生姜汁にて やもつげる 糊にて 練り 胡椒
の大さ 丸じ 二十粒づ 食後 美湯にて用ゆ 同

羊久しく 煮 嚥息して 脇 或い 血を 吐して 出るに
蘿蔔子一合 搗碎き 水にて 煎じ 食後 のこす 衛生易簡方

又方 桑の枝 ちさぐ 水にて 煎じ のこす 同

嗽 嗽 常 長 久しく やまず 自汗出る
嬰粟殼 を 炒 粉にして 二匁 烏梅一箇 水 煎じ 漉して 食

後に飲下してよし茶汁をぶるふい浮小麦三十粒入煎じ用る方　衛生易簡

喘息して胸いたむ

半夏を沈小投まぜ粉ふし為糊して祈り胡椒の大さに丸じ生姜湯

して三十粒づゝのむべし　治法彙

痰つよく喘息し小便をかゝるに

半夏七粒熱湯にて泡皂莢皮に絞とをさり一寸丹草煎りて一寸生

姜指の大さ程なるを一つ水大棗碗に一盞入煎小煎一度に

飲べし　同

或い憂或い驚ふより乳の辺り喘ぐふ

半夏二分茯苓二分厚朴二分棗核一分甘草二分合こなし

生姜七片棗二つ入水にて煎じ用る　得効方　半夏の毒熱にて

老人乳そゞろり喘息し

猴子白茯苓蒲萄子名号紙のよゝく少粉搗ぐ紀二ふで

飲ふつゝ熱湯に入棗の代ふの丸べし名ふ生姜を加へて用る方　衆妙

老人久しく喘息をうづゝひ欬いで閉とるゝざるに

杏仁皮と尖とを去胡桃の肉各分研たぐらし蜜少半いれ祈り

枇杷の核かぐ丸ど一三粒づゝ食後或い寝さるゝ嚼ぐ紀生姜

湯にて飲べし　衛生易簡方

小児痰にて喘息するに

巴豆一粒杵たぐらしつゝ鼻ふ塗ざてよし男子は鼻

乃左の孔女子は右の孔へ塗げば疾たのづゝ出く食べし　本草綱目

欬嗽

欬嗽やまぬふ

招揚仁麦こ熟てたりを一つ去皮をさり

招揚仁の数程右二味共に筋粉にして祈り大豆の

なすに丸じ四十粒蘿蔔を搗て煎じて汁を寝る前に用ひ本草綱目

又方蘿蔔子炒黄末粉末にして砂糖にて練り枇杷の核の大さに丸じ絹にて口に含み汁を嚥下して効 同

又方貝母を粉末にして砂糖にて練り丸じ口に含み津にて飲 衛生易簡方

又方桔梗を細末にして蜜にて丸じ一服 肘後備急方

又方枇杷の葉毛を去り桔梗と共に炙じ用ひ糖にて丸じ飲ず 彙聚単方

又方桔梗仁を麻油に泡して七度して糖に乾して粉末にして生姜汁にて練り胡椒の大さに丸じ卒に飲ず得効方

卒に飲ずして出るに生姜一百斤根汁同じく炙じて飲ず 肘後備急方

又方百斤根四十なすこの二味を合して二度煮て酒を温めて飲ず 同

又方生姜三十なを搗汁を絞りて干姜と粉末にして三十なを杏仁二合皮を去り熬て搗て丸じて白湯にて用ひ 同

又方梨一顆椎にて孔を五十あけ胡椒を一粒づつ孔の内へいれ麻粉にて煨て熱灰の内に埋て煨ひ胡椒を去て梨を食べて効 同

又方羊肉を煮て熟して煎じ汁を去て蜜にて糖に粉末にして丸じ用ひ方病人に丈夫の者に用ひ同

又方興渠粟殼十なを茎と肉の筋とを削り去て酢に浸して炒烏梅二なを共に同じく粉末にして一服づつ白湯にて嚥て効 本草綱目

用ゆ仙方歴験の嗽薬ト自作ス

又方生姜を搗くだきて二十匁錫八十匁同じく炭熱し連くり

食べてよし　同　本草綱目

又方紫菀十匁款冬花十匁百部根匁粉にして丸ず生姜二片

烏梅一つ水にて煎じて用ゆ　同

又方陳皮杏麩生姜焙りかいて等分粉にして餅糊にて搗り

大豆の大さに丸ず六七十粒寝る時白湯にて用ゆ　同

肺熱にて痰欬ひどく胸ふさがる

拈　橘仁十匁半夏熱湯ふみ洗ぐこと七度にして十匁粉にして麻

粉を生姜汁にてそれ丸の二味の粉をねり大豆の大さに丸ずて百

粒食後に生姜湯にて三ト丸べし　同

又方柿を搗けをたばり飲べし　同

久しく痰出て喉中息づいの音あり眠られず

白前　橘粉にして二匁温き酒にて用ゆ　肘後備急方

又方蓋の実と茎ふとり浸し久しく搗きたり汁二三合ばかり

ちょっと飲べしさて苦くして苦仁を研ぎて煎じ用ゆ

其汁にて粥を煮て食べてよし　同

年久しく痰嗽いで上気して息だるしきを

菊苗を研つぶして水にて煎じ食べしめてよし　衛生易簡方

欬嗽つくり胸脹らむ

五霊脂二十匁胡桃仁八十匁栢子仁等粉にして粉り小

豆の大さに丸ず四十粒ず生姜の煎湯にて用ゆ　本草綱目

欬嗽はげしくて息ぐるしむ

青黛蛤粉等分粉にして白湯にて用ゆ　治法彙

又方生姜汁をのむべし　同

嗽いで心気ふるふ

滑石六匁　茸草一匁　辰砂少し　加へ粉にして一二匁づゝ白湯にて

用ゆ　治法彙

虚分にて熱あり欬嗽いで脇血を吐に中并に吉咽までかわきさゝふ

黄芪四匁　茸草十匁　粉にして二匁粥の内へ入食してよし　肘後備急方

欬嗽やまず痰に血まじりくいづる

百合を煮て焙り数々花色粉にして煮て初り能服用乃

又さに九ゝ一二九づゝ食後に生姜湯にてのよし　得効方

又方小児胎髮を燒灰にして麝香少々入酒にて用ゆ　本草綱目

欬嗽甚しく解ける血を吐く

素根白皮八匁　茸草小浸一二日三度煎して服す　裂皮を制

去楊茸二十匁　焙り同じく搗粉にして二匁ゞ飯のゝり湯にて

用ゆ　志方

吐血の後欬嗽いづる

紫花地丁同じく炒粉にして煮て初り黄子の大さに丸へ

一粒づゝ嚼ぐべし　本草綱目

血喀りて嗽やまざるに

桃仁大黄酒にひたして炒粉にして生姜汁にて初り丸ゞ飲べし　治法彙

乳汁の欬嗽急ばしく空乳あるに

半夏十匁　南星十匁　因楂肉匁　粉にして糊にて初り大豆の大さに

丸ゞ百粒程づゝ生姜湯にて用ゆ　同　半夏の項製法の下に有り

温疫にて欬嗽いで汗をかく例にて

半夏十匁　南星十匁　白朮十匁　粉にして糊にて初り大豆

の大さに丸し百粒程づゝ生姜湯にて用ゆ　同　半夏の項製法の下に有り

空乳少あるに嗽いづる

生姜うすく切焙り粉にして糊にて初り茨子の大さに丸ゞ

食後に飯のゝり湯にて用ゆ　衛生易簡方

酒を多く飲く嗽おやまぐらふ

白殭蚕を細末にして一匁茶湯にて用ゆ 本草綱目

又方青黛 栝樓各等分粉にして蜜にて練り丸し白湯にて用ひ 治法彙

又方紫花地丁の汁をのべうし 衛生易簡方

乾欬いで痰なしかさく

熟したる栝樓を搗たるし汁を絞りとり蜜を等分ふれ

搾りて白蜜にてねりつめ膏ふしたるべつ蜜ぐりを湯

又方白蜜百目生姜二百目梓汁をとりまづ蜜ぐりを湯

にて湯とる小目をかけあるくあ椒姜汁を入火をゆるくして熬

蜜ぐり入れ用ふるり附子火をとりおろし火気を除き

丸さ小丸どのべうし 治法彙

欬嗽上気さとる

乾姜 皂莢同ども火の底へ入炮して桂心二味等分粉にして

蜜にて練いで虚熱ありて口かわき渋いづる

年歳の汁と四合をあわせ米三合を粥小者四小二度で

食べ尽し 同

大人小児ふるへて欬つよく息だらしく涙唾して或い臭き膿を吐ふ

浩竹をあぶり源をとり多くのべうし 肘後備急方

老人欬嗽つよく上気し食とれば吐逆し腹張しく

生姜汁五合砂糖二合火をゆるくして煎じ二十度ばかり煎じ

で食べのべうし 傳信方 易方

小児欬嗽ぐるふ

蜀椒を焼粉にして二分を酒で飯のそり湯ふくまぜ用ゆ 衛生易簡方

又方生姜を多く水にて煎じその湯を服べし 本草綱目

又方紫花地丁を粉にして蜜にて丸その者をいれ研てその大さ

丸ごとして一粒五味子の煎湯の用へ入つきごで紀用の煎法よく煎ふ
ごろふよし　本草綱目

又方貝母四匁　甘草二匁　半夏四匁　右末して粉にし砂糖水にて
練り煎るのちに丸ごとして一粒飯のごとく湯ふくれ拌ごごき用ゆ小
児の百日咳ふよし　同

肺癰　附肺痿

肺癰い肺の膿を癰をなし大概欬咳いで脇に数あつく咽ゐさ喘
湯りなるごさくなして膿血を吐き独血を出の中へ吐せて沉むのごとく
桔梗一匁　甘草二匁　小天門冬一匁　貝母二匁　膿血を吐つくして痊べし　同

又方　薏苡仁二匁　紙を焼ごて粉にし小天門冬一匁　水天門冬二匁入
ごらふく小煎じ用ゆ　得効方

又方　真珠乳粉十匁　滑石二十匁　粉にして一匁ごとに飯のごとく湯にて用ゆ　同

又方　薏苡仁　麦門冬　水二十匁　粉にして枇杷の大さ程の丸にし一粒二十匁を水
七合半ふくに煎じ五合に煮つめ右の丸薬一粒をとれば煎じ薬一二合
ずつ小者つめ　衛生易簡方

肺痿い大概欬嗽いで涎を多くは唾を吐き中燥さ咽ゐ
渇ごとのなり

甘草　人参　清煎じ　肘後備急方

又方　天門冬　橘汁　牛蒡一合　紫菀の粉末合
同じく紫蘇子入煎じ練りつめ杏子の大さ程の丸にし白湯
にて飲べし　同

又方　甘草　六分　乾姜　九分　巻一つ　水天門冬二匁入一匁にて煎じ　同

呃逆

唖逆おくやゆぎろふ

生姜二三片かうそうし　本草綱目

又方山椒二三十粒粉にして麩の糊にて小豆程ふみしそ十粒づゝ湯にて強をさし用ゆ　同

又方波そのゆを多くのむべし　肘後備急方

又方紙柏そ鼻の孔をさし嚏を出してよし　同

又方皂莢を粉にして鼻に吹入嚏を出してよし　同

冒中卒人唖逆出ずくやゆぎろふ

呉茱萸湯にて度と七度にして焙りめいうにて一名青皮

うとまた紀焙りうとて一名生姜一片水五月小二盃入一盃に

莢ど熱にして用ゆ　傳信方

又方細辛又て丁香二名又分粉にして一名存茸の羹湯

飲ずし　本草綱目

又方硫黄花硝石烟を嗅ずくして　同

又方沉香紫蘇白豆蔻等分粉にして六七分づゝ存茸の羹湯

にて用ゆ　同

唖逆久しくやまざるふ四五十あり

生姜汁を冷蜜一匙いれ莢ど熟にのこそし　傳信方

唖逆つゝくお死んとするふ

生姜生姜等分ゆにて濃莢ど用ゆ　同　生姜の子制法のおこあり

嘔吐

恐怖やゆぎろふ

白豆蔻を粉にして温湯にて飲ずしていろがども可ずし　衛生易簡方

又方柹柿子をくそし　肘後備急方

乾嘔やまざるふ

葛根を搗いをそりのこそり　本草綱目

又方生姜を嚼そしをのこそり　同

又方生姜を粉末白湯にて用ゆ　肘後備急方　生姜のる制法はのるあり

又方蘇子白こをさり莢こそり　同

又方乳の下すゆ灸を三十壮をくくそり　得効方

疾にて熱ゆや腹ざるゆ

蕈撓を搗粉にして四分方に搗て飯のそり湯にて用ゆ　肘後備急方

疾癰にて乾呕つよく絶こそく飲食下らざるゆ

厚朴をこざこ姜汁ゆうさまぜ蒸こそ粉ゆ二匁づく飯

のそり湯にて用ゆ　本草綱目

又方砂糖と生姜汁と等分にして莢ド二十度沸にそかづく

嚥こそり　同

又方生姜ゆ蜜ゆうまく絶莢ドかばくそ絶くくと用

こそり　肘後備急方　生姜のる制法はのるあり

嘔ーこそりに喉渇ゆ

水かーづくのこそり　治法彙

又方猪苓白朮茯苓等分粉にして飯のそり湯にて用ゆ方　傳信充易

呕吐や腹ざるこそ

芦根を水にて絶莢ド飲ーー　本草綱目

又方浮皮ーーを生姜二分水天目ゆ二匁にれーーを莢ドかづく

そろくと用ゆ　同

又方橘柳一顆陳皮二匁多分細ゆこざこそ莢ド

用ゆ　肘後備急方

又方熱湯一椀水一椀ひとつに搗ぜのこそり　千金簡易方

又方芎の根にて喉をさゞり疾を吐出ーーこそり　治法彙

又方枇杷の葉を水にて莢ドのこそり　傳信充易方

食後に磁水を吐す

干姜食茱萸各分粉にして二匁酒にて用ゆ 千金簡易方

常に吐く磁水を吐す

頭の垢を石豆のかさ程ほど磨りて茶にて服す 本草綱目

又方 陳皮ごとき粉にして五分度ふくめの用ゆ

初めをおいら腫るべし三四度用ゆ 同

常に吐く清き水を吐す

芡蕊を水に煮てのうそう 同

胃気弱くして食すれば直ぐに吐くもの

薄荷茶 勢効方 衛生易簡方

胃中冷えて吐やまぬもの

生姜を粉にして二匁白湯にて服す 同

しばしば黄色の汁を吐す

胸中火ありて食すれば直ぐに吐かんとす

大黄一匁 甘草二分 以上水一盃にて煎じ半盃にして用ゆ 本草綱目

胃脘に熱あり胃中に宿あり吐やまぬもの

附子炮にして二十匁粉にして初め胡椒の大さに丸ず大黄を衣にして二十粒ずつ二十粒ずつ生姜湯にて服す 得効方

胃中虚冷痰あり吐あるもの

附子一匁半 生姜四匁片水六盃煎じ半盃にして用ゆ 本草綱目

或は本蕃を加へ煎じ用ゆ

熱を去るにはいろ吐或は酒を多くのうそう 同

赤小豆の煮汁をあづくのうそう

又方 黄蘗の粉一匁熱酒にかきまぜ食後に飲べし 救急易方

附子の制するほの不さあり 生姜の制するほの不さあり

又方 葛根十匁 半夏熱湯に泡て十匁 甘草 茯苓 共に細末にして

合て二匁 天目小一碗 竹茹一握 生姜 又片茶 共に用ゆ 治法彙

酒を半升 水を多く 飲みより腹に積を生じ 脇後 脇 時々吐し 脇の

うらわの者のごとく 呼く

川芎 三稜 各分粉にして一匁づつ 葱白根を水に煮て 共に用ゆ 本草綱目

小児吐 吐やまざる 熱さんのあるに

蕎粉二匁 水二合に溶して 濃くいれ 熱湯 少ひたしあくまち 粥

のうわ湯をいれうさぬぬ用ゆ 同

小児 吐 吐 あるに

五倍子 二個一つに 黄り 熟して一つ 半夏 三匁 温 紙 つつ

絶て 二味 粉にして 麦粉 小 に 接 用ゆ 衛生易簡方

小児 風 熱 あり て 吐 吐 ざる

朴硝 滑石 各分 粉にして 麦分 粉 麦 麦 清油 麦 麦 のうら 接 用ゆ 得効方

又方 黄連一匁 豆 二十粒 天目小七分 入 麦分 黄 用ゆ 小児の大

小 ふりて加減 べし 傳信方

又方 蘭 黄 を細小 研 麦 づ 生地 黄 け 一 ふ 飲べし 同

小児 飲 を 吐 ふ や 泡 ふ

半夏 を 抜湯 して七度 泡 粉 生姜湯 して用ゆ 得効方

小児吐乳やまざるに

地骨皮 を 麦 して 黄 用ゆ 衛生易簡方

又方 蚯蚓糞 粉 して 麦分 飯のうら湯 入 ふ 飲 て 後 用ゆ 同

又方 白豆蔻 仁十四 甘草 二匁 粉 して 常に小児の口中に 摻 て ふ 本草綱目

又方 義 木 かぐ ふ 塩少 ぐ ふ 乳 け て 黄 し 麦 度 沸 て 生 黄 を

栗 米 二粒 ぐ 入 ふ て 用ゆ 同

又方 田中 の 泥 を ふ 研 細 して 麦分 て 後 飯のうら湯

して用ゆ　本草綱目

又方半夏一文洗薬米七分文産生姜一片水天目小一盃半入一盃小
煎じつめ用ゆ　十便良方　半夏の事制法の下にあり

小児吐乳養の五方

ろくさ婦人の乳汁一盃丁香十粒陳皮ゑ〜をすき三文入煎じ二
十度沸〜そのゝそよう　本草綱目

滋補の小児吐乳して熱出くやまざるゆ
石燕を粉にしてゆでゝ蜜にて練りて服ゆ　同

喧食

食すれば咽ゆつく喧て食下らざる時の中に肉桂をやうにおぼへあと
ゆゝ

丁香一文本香一文水天目小一盃半入一盃小煎じ半減小飲

くさ〜　本草綱目

又方羚羊角を焼灰にして二文ゆ〜ゆ用ゆ　傳信方易方

又方昆布二十文鹹をあらひ去小麦二合水大椀三盃入煎じ麦の
烟熟しゆ時に去猪口小一つ程づゝ食べ〜并に昆布を揀あ
しゆづゝ口中にあくして汁を嚥下しくさ〜　同

又方鬱熱の咳をゆ口中にあくして　本草綱目

老人喧病にく飲食下らざる

粳米一合粥小煮大椀煮熟して肉桂の粉十文いれくさまぜ煎
後に食して〜　傳信方易方

又方熟湯一升の中へ白蜜十文いれくかくさまぜ飲くさ〜　同

反胃

反胃い食したるものを吐くことをあり或い今日食

中ろ和をはりはいつををあり

胡椒を碎くひて一日ふ乾と七遍して搗て篩て糊にて丸ど

三四粒づ湯に碎をかーさ用ゆ又い熱灰ふ煨ち炮て去る生

姜一ゑ胡椒七分ゑ重ゆて煎ど用ゆ 本草綱目

又方乾柿三つ姜とに搗たぐらーて麦小酒にて飲下てーかの素

如炙へ用ゆいあく 同 但生柿ふあく

又方茯苓を粉ーて一ゑ酒にてのみてーー 同

又方伏龍肝を飯のそり湯にてのみてーー 同

又方茅根芽ゑ根皮ゑ水にて煎ーてふのそーー 同

又方槐殼をやき炭ーて飯のそり湯にてのみてーー 同

又方生姜汁にて粥を煮て食ーてーー 同

又方罌粟殼を水にて煎ーのみてーー 衛生易簡方

又方乳の下一寸当方にて脈の上に手一完豆の三豆ゑ加ふて煎と七

牡蠣い丸牡づをへくーー 得効方

胃中冷ふりて反胃とあり食下ぜば吐て久とふ

白豆蔻二粒粉ーー酒二三合の内へいれ溜めのひべー 傳信易方

又方附子一ツ生姜百匁ゑ細ふきげ煮く糊のどくーーゑ行づく

飯のそり湯にて用ゆ 同

又方附子を粉ーー生姜汁にてやうげくる糊にて豆程ふ丸どて大

煎の粉を入ーー十粒づ温湯にて用くーー 同 附子の項に制法あり

又方大なる附子一ツ生姜汁にて煎ーー丁香一粒と同じく粉に

くーふくりづくものーとき紙くーー 同

又方栗殼を粉ーーゆにて練り大豆の大さ程ふ丸どて七粒ゆく

入煎たぐらーゑ出ーー碎ふれのくーー 肘後備急方

反胃食を吐胸中痞ゑに

除皮烟脂教いるを焼灰ーて二ゑ津にて飲下べー 傳信易方

反胃久しく羸こく食気なきこと

毎生姜を搗けをしぼりうり粥ふれかきほぜ用ゆ　傳信易方

又方茸蕨けをしぼり一合ほどに生姜汁二合まぜ用ゆ　同

冷涎反胃い発らんとをり付まづ作るる涎をなべて其汁を食とるものこ

ろく治せざれば命あやうし

大麦十五生姜汁ほど盞半大麦を炒り焦て生姜汁一椀入七度沸

し生姜汁にて切搗り粉にして二度陰干し　搗蔥白二茎山大素碗に

一盃入七分ほどに小麦こがしまぜて蔥白汁食しこく後葵湯を

飲ませ　景聚單方

普救類方巻之三上　終

国立公文書館
National Archives of Japan